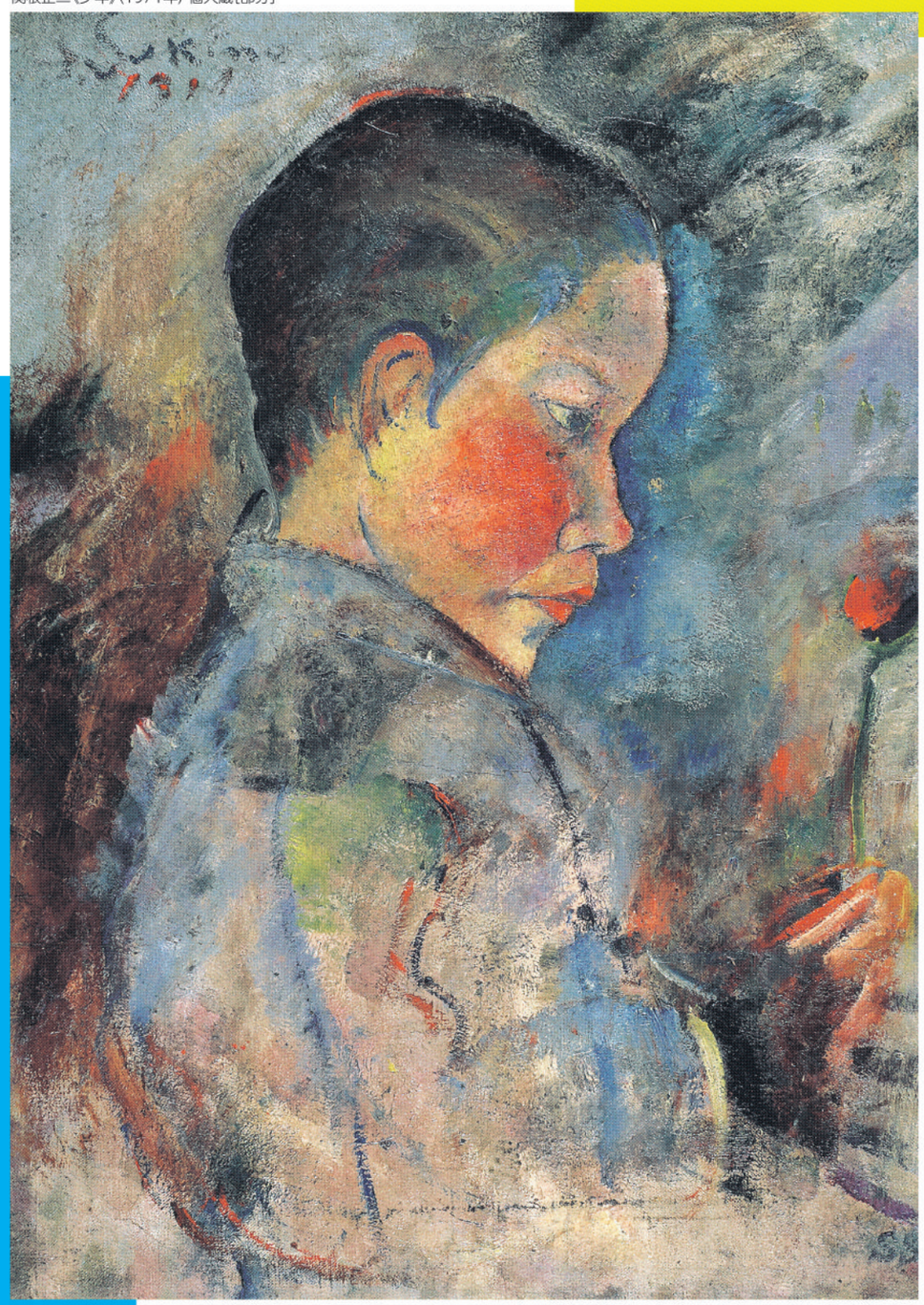
顕神の夢 幻視の表現者 村山槐多・関根正二から現代まで

Yearning for Visions — From Kaita Murayama and Shoji Sekine to Present Times

広告特集 企画・制作 朝日新聞社メディア事業本部

碧南市制75周年記念事業 開館15周年記念

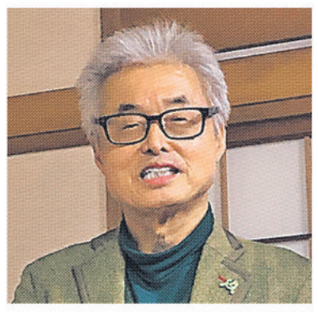
関根正二《少年》(1971年) 個人蔵[部分]



〝霊性〟をテーマにした企画展「顕神(けんしん)の夢」が、明日から碧南市藤井達吉現代美術館で開催される。人知を超えた「何か」をとらえて表現することにフォーカスし、魅力ある国内作品を紹介する同展。近代の名作から現代美術まで、作家約50名の絵画・書・立体作品120点余が並び、なかには岡本太郎ら著名アーティストの大作も。公立美術館巡回のラストを飾るのが今回だ。なぜこのような展覧会が生まれたのか。どう味わうか。監修を務めた宗教哲学者の鎌田東二・京大名誉教授に聞いた。

今は「荒魂」の時代 作品の声に耳を傾けて

京大名誉教授 鎌田 東二さん



かまた・とうじ　宗教哲学者。1951年徳島県生まれ。京都造形芸術大学教授、京都大学こころの未来研究センター教授、上智大グリーフケア研究所特任教授などを務めた。2016年より京大名誉教授。2021年より日本臨床宗教師会会長。近著に「悲嘆とケアの神話論―須佐之男と大国主」(春秋社)など。

近年、霊性、魂の世界、神仏といった目に見えないものへの注目が高まっています。

そして、多発する自然災害、陰惨・凄惨(せいさん)な事件。世界は危機に瀕しています。神道において荒魂(あらみたま)、和魂(にぎみたま)という対概念があり、荒魂は神の荒ぶる魂、和魂は平和な魂ですが、地球環境にも人の心にも荒れ狂うものがある今は荒魂の時代と言えます。スサノヲという神が荒魂の象徴である怪物ヤマタノオロチを退治した後に詠んだ歌は日本における歌の始まりになりました。霊性や魂といった領域に歴史的に関与してきたのが芸術で、芸術には荒魂を和魂に変容させる力があるとも言えるのではないでしょうか。だから今、こうした展覧会が行われるのは必然とも考えます。

同様の〝霊性〟をテーマにした主に公立美術館を巡回した先行の展覧会が2つあり(「スサノヲの到来」展、「諸星大二郎―異界への扉」展)いずれにも関わらせていただきました。先行2展からさらにパワーアップした同展は、素晴らしく多様で、万華鏡的です。作家みなが個性的でエネルギーあふれ、それぞれの作家が持つ感覚の共通性や、深いところで共鳴し合うものが見えてきます。隣り合うもの、向かい合うもので作品の放つエネルギーは変わり、そこにハーモニーが生まれ、まるで交響楽を聴いているかのようです。

自分の中に鏡のように映り込む芸術鑑賞は一つの瞑想の時間ですが、今回は特にそこへ入りやすいのでは。作品を前にすればそこからメッセージが聞こえてきます。一点一点を旅するように訪ね、作品の声を聴いてください。そしてその声と自分の声を重ねてください。きっと心のどこか深いところ、普段は閉じている、気付いていないところに響くものがあるでしょう。

〈からだはうそをつかない。が、こころはうそをつく。しかし、たましいはうそをつけない。〉芸術とは〈うそをつくこころとうそをつけないたましいとの闘争と和解〉ともいえ、自由奔放にイマジネーションを繰り広げていくこころを、あるかたち＝作品に仕上げていく妥協を許さないたましいとのすり合わせ、「顕神の夢」展はその「こころとたましいのドラマ」が多重多層に見えてくる展覧会だと思います。

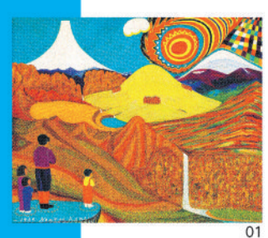
人生に変化をもたらすアートセラピー要素が詰まった本企画展には、今悩みを抱えている若者や、普段アートに触れることがなかった方にもぜひ足を運んでいただきたいです。

(談)

10

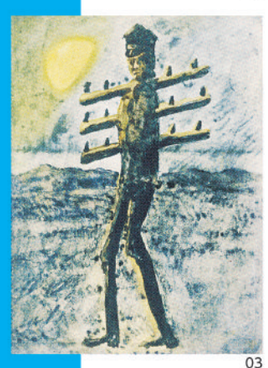
11

12



01

02



03

04

「霊性の尺度」で見つめ直し 作品の魅力再発見

人知を超えた「何か」をとらえようとする。しかしそれはとらえようとすればするほど叶(かな)わず、訪れるのを待つしかない。表現者のそんな心情を表わしたのが「顕神の夢」というタイトルだという。

同展では、近代の美術史観とは異なるものさし「霊性の尺度」によって、これまで十分に評価されなかった作品に光を当て、すでに評価が定まっている作家・作品についてもとらえ直し、魅力の再発見、再認識を試みる。それは新しい角度から日本美術史の編み直しを図るチャレンジでもある。

時代もジャンルも超えた 作家たちが集う

「幻視の表現者」という共通項により、日本近代美術を代表する作家から新進気鋭の若手まで、幅広い年代の幅広い作品テーマで展開される。

まず「見神者たち」で紹介するのは、幼少期から神霊と交流したという金井南龍の《妣の国》など、人間を超えた存在とのダイレクトな交流があっての表現。

「越境者たち」は常人と異なる視点でこの世界を見る作家の作品を展示。岡本太郎、草間彌生、横尾忠則、また、宮沢賢治など豪華な顔ぶれ。展覧会の象徴的な作品が中園孔二《無題》で、「最も身近で神的な左手に見えた別世界、宇宙が描かれる」(鎌田氏)。

05

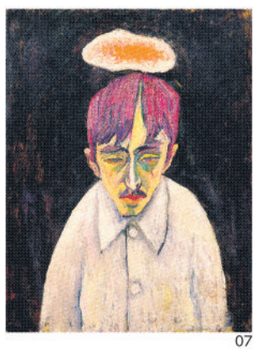
06

「幻視の画家たち」は、幻、または宗教的なビジョンを制作のモチベーションにした作家の絵で、八島正明《給食当番》、萬鐵五郎《雲のある自画像》など。大正の鬼才と呼ばれる村山槐多や関根正二も新たな視点でとらえ直す。

頭や心に浮かんだ光、内的なものを映し出す作品が並ぶのが「内的光を求めて」。エネルギー体を画面に定着させているという横尾龍彦は、《龍との闘い》《枯木龍吟1》など3作に「荒魂から和魂への変容を見てとれる」(鎌田氏)。

独自のビジョンを通した「神・仏・魔を描く」では、江戸時代の円空までさかのぼり、同館が名を冠する藤井達吉も併せて紹介する。

人知を超えたものに触れた表現者たち。その作品を前にした時、何を感じ、受け取るのだろう。ぜひ実際に会場で作家のエネルギーと触れ合ってみてほしい。

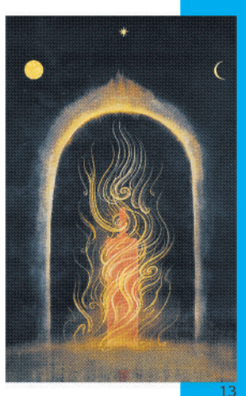


07

01 金井南龍《妣(はは)の国》(1969年)さすら蔵
02 横尾忠則《如何に生きるか》(2012年)作家蔵(横尾忠則現代美術館寄託)
03 宮沢賢治《無題(月夜のでんしんばしら)》複製画 林風舎蔵
04 八島正明《給食当番》(1975年)碧南市藤井達吉現代美術館蔵
05 中園孔二《無題》(2014年)個人蔵 ©Koji Nakazono, Nakazono Family Courtesy of Tomio Koyama Gallery
06 岡本太郎《千手》(1965年)川崎市岡本太郎美術館蔵
07 萬鐵五郎《雲のある自画像》(1912-13年頃)岩手県立美術館蔵
08 村山槐多《裸婦》(1915-16年)町立久万美術館蔵
09 関根正二《神の祈り》(1918年)福島県立美術館蔵
10 横尾龍彦《龍との闘い》(1988年)鎌田東二氏蔵
11 横尾龍彦《枯木龍吟1》(1988年)鎌田東二氏蔵
12 円空《十一面観音菩薩立像》(江戸時代)林泉寺蔵(碧南市藤井達吉現代美術館寄託)
13 藤井達吉《炎》碧南市藤井達吉現代美術館寄託

08

09



13

関連イベント

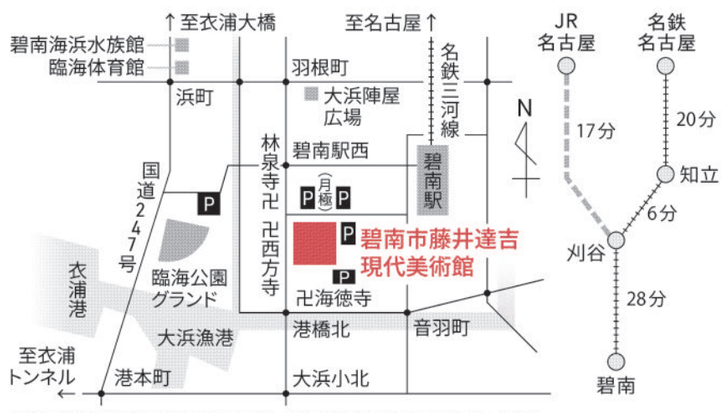
●開催記念鼎談「顕神の夢」 聴講無料／定員:60名
日時:1月6日(土) 14:00～15:30 会場:地下1階多目的室B
登壇者:鎌田東二氏(京都大学名誉教授・本展監修者)、土方明司氏(川崎市岡本太郎美術館館長・本展提案者)、江尻潔氏(足利市立美術館次長・本展提案者) ＊聴講ご希望の方はお問い合わせください。

●担当学芸員によるギャラリートーク 予約不要
日時:1月14日(日)、2月3日(土)・18日(日) 14:00～約30分程度
観覧券をお持ちの上、2階ロビーにお集まりください。

2024年1月5日(金)－2月25日(日)

開館時間:10:00－17:00(入館は16:30まで)期間中展示替えあり(前期:1月5日→1月28日、後期:1月30日→2月25日)
休館日:月曜日(1月8日・2月12日は開館)、1月9日(火)、2月13日(火)
観覧料:一般 900円(720円) 高大生 600円(480円) 小中生 400円(320円)
( )内は20名以上の団体料金。未就学児童、市内在住・在学の小・中・高校生、市内在住の65歳以上の方、各種障がい者手帳をお持ちの方と付添1名は無料。受付に証明証をご提示ください。
主催:碧南市藤井達吉現代美術館、碧南市、碧南市教育委員会、顕神の夢展実行委員会
共催:朝日新聞社 助成:一般財団法人地域創造 監修:鎌田東二(京都大学名誉教授)

本展の情報はこちら→



●名鉄ご利用の場合:名鉄本線「知立駅」乗り換え、名鉄三河線「碧南駅」下車、南西方向へ徒歩6分。
●JR東海道本線と名鉄をご利用の場合:JR「刈谷駅」乗り換え、名鉄三河線「碧南駅」下車、南西方向へ徒歩6分。●知多半島道路・阿久比インターから車で約20分(衣浦大橋を渡って右折)●駐車台数に限りがありますので、公共交通機関をご利用ください。

碧南市藤井達吉現代美術館
HEKINAN CITY TATSUKICHI FUJII MUSEUM OF CONTEMPORARY ART
〒447-0847 愛知県碧南市音羽町1-1 TEL:0566-48-6602 FAX:0566-48-6603